

研究ノート

## 福島県内のカワウ (*Phalacrocorax carbo*) の体内に含まれる放射性セシウム濃度のモニタリング調査

斎藤 梨絵<sup>\*1,2†</sup>、根本 唯<sup>3</sup>、熊田 礼子<sup>1</sup>、壁谷 昌彦<sup>4</sup>、舟木 優斗<sup>5</sup>、神田 幸亮<sup>1,4</sup>、趙 在翼<sup>2</sup>

**【要約】** 2011年の東電原発事故後、淡水生態系内における放射性セシウム (Cs) 汚染が強く懸念されている。カワウ (*Phalacrocorax carbo*) は、淡水生態系の高次捕食者であり、水域生態系内の放射性Csの動態把握において深く関連した位置づけにあるが、これまでに福島県のカワウの<sup>137</sup>Cs濃度に関する報告はほとんどない。本研究では、福島県内の<sup>137</sup>Csの汚染の程度が異なる地域で捕獲されたカワウについて、<sup>137</sup>Cs濃度のモニタリング調査を行い、地域による差異や他の鳥類の<sup>137</sup>Cs濃度との比較を行った。2017年から2019年に福島県の3地域(会津、中通り、浜通り)で捕獲された42個体のカワウの筋肉中の<sup>137</sup>Cs濃度の比較を行ったが、地域間による差異は認められなかった。地域差がなかった要因として、カワウの食相の多様性や、各魚種に含まれる<sup>137</sup>Cs濃度の違い等が考えられる。また、カワウの筋肉中の<sup>137</sup>Cs濃度と胃内容物の<sup>137</sup>Cs濃度の関係において、有意性はないが、正の関係にある傾向がみられた。カワウの<sup>137</sup>Cs濃度は、ヤマドリやカモ類と同程度であり、キジはこれら3種に比べて有意に<sup>137</sup>Cs濃度が低いことが確認された。

キーワード：カワウ、福島第一原発事故、淡水生態系、放射性セシウム、モニタリング

---

2022年4月3日受付 2022年8月4日受理

\*Corresponding author: Email: [saito.j.rie.animals@gmail.com](mailto:saito.j.rie.animals@gmail.com)

<sup>1</sup> 福島県環境創造センター (〒963-7700 福島県田村郡三春町深作10-2)

<sup>2</sup> 国立研究開発法人 国立環境研究所 福島地域協働研究拠点 (〒963-7700 福島県田村郡三春町深作10-2)

<sup>3</sup> 東京農業大学 奥多摩演習林 (〒198-0212 東京都西多摩郡奥多摩町水川2137)

<sup>4</sup> 福島県環境創造センター 野生生物共生センター (〒969-1302 福島県安達郡大玉村玉井字長久保67)

<sup>5</sup> 福島県内水面水産試験場 (〒969-3283 福島県耶麻郡猪苗代町大字長田字東中丸3447-1)

†現所属：Savannah River Ecology Lab, University of Georgia, Aiken, SC, 29802, USA